



編集月旦 2015年7月号

★7月15日、衆院特別委員会で「安保法制」の強行採決があつて、夕方に国会正門前で市民の抗議集会が開かれました。いつもながらの団体幟も多くありましたが、「命」にかかわって参加している若い女性の姿が目立ちました。女性は歴史よりも本能的に「命」の将来に危険を感じとっているようです。参加者のなかに高齢の人たち、60年アンボ世代くらいの人が出てきていて、こちらは歴史の転回の萌芽を感じてのやむにやまれない衝動によるのでしょう。各党のリーダーが出て戦いを継続する演説をしていましたが、冷静に「命」の問題として心に響くことばを聞いて、納得の拍手をする場面はありませんでした。

☆平和な時代に暮らしていると、天寿を全うして生涯を終えることは、それほどむずかしいことではないように思われます。が、戦争に明け暮れていた時代やそれが予測される時代には、安眠できることこそが理想の人生でした。長い平和がつづいて、「戴白の老も干戈をみず」（老人も戦争を知らない。北宋時代）というのは、歴史上でも稀有な時期といえます。それでも災害や事故に遭遇して、だれもが天年を尽くして穏やかに「寿終正寝」を迎えることはむずかしいのです。古来、長寿は上寿百二十歳、中寿百歳、下寿八十歳（孔穎達等『正義』など）といわれています。

★堀田力さわか福祉財団会長は、「命」の感覚の進化が男性に必要であり、先進国はそういう戦わなくてすむ文明文化まで進歩しているといわれます。人口が減少する「少子化」は、命をたいせつにする意味で戦争を忌み嫌う意識と重なります。「命」の感覚に進化のない文明文化の失格者、戦争を言い軍備を言う男たち、戦う場しか論じられない政治家に、戦わないための「憲法」の文面をいじる資格はないでしょう。

★「長寿は平和の証である」と樋口恵子高齢社会をよくする会理事長は、内閣府主催の「高齢社会フォーラム」（7月31日）の基調講演で語りかけています。「わたしたち平和の証として、この人生90年、100年をしっかりと守りつづけ、いま戦後70年を迎えております」また「命が主人公であるということが平和の代名詞なのだ」とも。

★「高齢社会白書」の公開は有村担当大臣の記者発表がすべてだったのでしょう。記者から関連質問はありませんでした。年間の事業をまとめた「白書」の骨子が記者に伝わらずして一般の読者に伝わらうはずがありません。「白書」には、高齢化の状況 高齢化率 環境の現状と動向 家族と世帯 経済状況 健康・福祉・介護 就業 社会参加 生涯学習 生活環境 生きがい 一人暮らし 生活の不安 現在の楽しみ 人との付き合い 将来への準備 といった項目で、仔細な報告がなされているのですが、本号では、その中から本稿の関心で27点の統計表を選んで取り上げました。

★「平成26年簡易生命表」の概況（7月30日発表）は、男性の平均寿命が80.50年、女性の平均寿命が86.83年であったことを伝えています。もちろん女性は世界1です。男性は世界3位で、男女合わせて世界1は誇るべき成果です。

☆論考『丈人力のススメ』は、2015年版として全編を公開しています。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」（成長＋成熟＋円熟社会）の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり、高齢者の課題であり、本誌の目標です。（編集人 記）

